2026 年 4 月 24 日

2025 年度　総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する（ ）に○を付ける	・共同研究（○）　　・個人研究（　）	
研究代表者 （所属・職・氏名）	建築・デザイン学部・教授・藤本麻紀子	
研究課題名	長崎県五島市におけるフィールドワーク実践の教育的効果についての研究	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
白川佳子 座間彩実	児童学部・教授 建築・デザイン学部・助手	研究総括、研究計画立案、データ収集、調査分析 データ収集、調査分析
研究期間	2025 年 4 月 1 日　～　2026 年 3 月 31 日	

研究実績の概要（1）

1．研究目的

近年、大学教育においては座学や学内実習のみならず、地域社会と連携した実践的な学習機会の重要性が高まっている。特に、異なる専門分野の学生が共通の地域課題に取り組む「学部横断型フィールドワーク」は、多角的な視点から社会課題を捉える上で有効である。本研究は、建築・デザイン学科と児童学科の学生が協働し、長崎県五島市でのフィールドワークを通じてどのような学習成果を得るのか、その教育的意義を明らかにすることを目的とする。対象地である五島市の福江島及び奈留島は、人口減少と少子高齢化に直面しており、2024 年には奈留島内唯一の保育所が小中学校内へ移転・統合されるなど、教育環境の転換期にある。本研究では、こうした離島特有の持続可能性や教育環境の実態を、教育施設の見学や地域住民・高校生との交流、空き家調査などを通じて学生がどのように捉え、専門性と結びつけたかを考察する。

2．研究内容と方法

本調査は、2025 年 9 月に実施された。参加者は児童学科 3 名、建築・デザイン学科 10 名の計 13 名であり、教員が随行した。調査は定量・定性の両面から実施した。定量調査では、Google フォームを用いて、地域住民、教員、保育士、高校生を対象としたアンケートを行った。定性調査では、以下の活動を通じて参与観察およびインタビューを実施した。あわせて、参加学生に対して事後アンケートを行い、活動を通じた学びや意識の変化について把握した。

・施設視察とヒアリング：奈留さくら保育所および奈留小中学校を訪問し、保育士・教職員へのインタビューを実施した。

・空き家実測調査：空き家の実測とともに、所有者や関係者へのヒアリングを行った。

・**地域交流**：五島高校生とのディスカッションや体験活動を通じ、地域理解を深めた。

３．学生調査から得られた成果と知見

本フィールドワークでは、学生が多角的に調査・分析を行い、以下の知見を得た。

（1）教育施設統合の現状と課題　幼・小・中一貫校の視察および教職員・保育士（9 名）へのヒアリングから、空間の共有が必ずしも活動の共有に結びついていない実態が明らかとなった。見守り意識の向上といった効果がある一方、給食内容や安全確保のための柵など、発達段階への配慮や交流面での課題が確認された。

（2）五島高校生の将来観と地域定住への意識　高校生 181 名へのアンケートでは、多くが進学で島外に出る意向を示したが、約半数は将来的な帰島を希望していた。一方、定住意向は約 25%にとどまり、職業機会や若者の居場所不足が要因として挙げられた。

（3）空き家の価値と地域ニーズ　実測調査やヒアリング、住民アンケート（11 名）から、空き家は原型を活かした活用が望まれていることが分かった。「カフェ」「学習スペース」などの需要も高く、地域交流の場としての活用可能性が示された。

４．学生の学びとその成果

（1）専門性の再認識と相互理解

異なる学科の学生が共に活動することで、それぞれが自らの専門性を見つめ直す機会となった。建築系の学生は、児童学科の学生が子ども一人ひとりと丁寧に向き合い、その行動を細かく観察する姿から、「人の動きや関わり」を空間に反映させる重要性を学んだ。一方、児童学科の学生は、空間のデザインや使い方が保育の質に影響するという建築的視点に触れ、環境づくりの重要性を再認識した。

（2）空き家に関する理解と住民への共感　空き家の実測調査では、建物の傾きや床のゆがみ、独特の空間感覚など、大学では得難い体験が得られた。また、家主から「できるだけ現状を活かしてほしい」という思いを直接聞くことで、建物を地域の歴史や記憶を含む資源として捉える視点が育まれた。こうした学びは、畳や足湯を取り入れるなど、地域性に配慮したリノベーション提案へとつながった。

（3）教育施設統合の現状と今後の課題　保育所と小中学校の一体化という環境を視察し、教育環境の多様性を実感した。一方で、時間割の違いや安全確保のための柵により、十分な交流が生まれていない現状も明らかとなった。これにより、学生は施設と運用の両面から保育・教育環境を考察する力を養った。

（4）高校生との協働を通じた自己成長とリーダーシップ　五島高校生とのディスカッションでは、学生がファシリテーターとして意見を引き出す役割を担った。高校生の主体的な姿勢に触れる中で、大学生自身もロールモデルとしての意識を高め、コミュニケーション力やリーダーシップの向上につながった。

（5）活動を通して育まれた地域への関心と社会とのつながり　活動後も地域への関心は継続し、「五島」に関する情報に日常的に触れる姿が見られた。「五島展」での発表を通じた社会発信の経験は、社会との関わりを意識する契機となり、多くの学生が視野の広がりや進路への好影響を実感している。

５．今後の展望

本活動は単年度にとどめず、継続的な教育プログラムとして発展させることが重要である。大学生との交流は、地域の子どもたちにとって将来を考える契機となる意義を持つ。今後も地域と大学が相互に学び合う関係を深化させ、持続的な連携モデルの構築を目指す。

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

Shirakawa, Y., & Fujimoto, M. (2026). A Study on Collaboration between Public Integrated Elementary and Junior High Schools and Nursery Schools. Proceedings of the 35th EECERA Conference, Funchal, Madeira, August 2026.